様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２４ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０１０９２

研究課題名（和文）人類史における国家形成プロセスの解明にむけた実証体系の基盤構築

研究課題名（英文）Building Foundations Empirical System for studying the State Formation Process in Human History.

研究代表者
有松　唯（Arimatsu, Yui）

広島大学・人間社会科学研究科（文）・准教授

研究者番号：６０７３２１１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：イラン北東部を研究対象として、主に鉄器時代（前2千年紀半ば～前１千年紀半ば）についての物質文化研究を行った。広島大学が当地で得た考古資料の整理と分析を行った結果、前８世紀頃を画期とする遺跡分布の変化と、イラン北西部と関連性のある土器の分布が明らかになった。資源戦略や地域間関係の転換がこの時期おこっていたと考えられる。また現地での新規データの獲得にも着手し、この前時代の集落遺跡に関する通時的な情報を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
イランの鉄器時代はアケメネス朝ペルシャの成立期として知られる。古代西アジアにおいて、アケメネス朝はイラン系初の覇権勢力であり、広大な多民族国家としても画期的な存在である。しかしその成立期のイランの様相には不明点が多い。とくに、鉄器時代のイラン北部に展開していたとされるメディアと称される民族／勢力については、物質文化の総体も明らかになっていない。本研究はイラン北東部について初めてのメディア物質文化研究の成果であり、アケメネス朝の形成研究にも貢献し得ると考える。

研究成果の概要（英文）：We conducted material cultural study in north-eastern Iran, mainly on the Iron Age (mid-2nd millennium BCE to mid-1st millennium BCE). As a result of analysis of archaeological materials obtained by Hiroshima University in the region, we revealed dramatical changes in the settlement pattern in the 8th century BCE and the appearance of new pottery ware possibly related to north-west Iran. It would be thought that some shift in resource strategy and inter-regional relations occurred during this period. We also started to acquire new data in the field and obtained chronological information on the site of the previous period.

研究分野：西アジア考古学

キーワード：アケメネス朝ペルシャ　メディア　イラン　鉄器時代　土器　古代国家　資源戦略

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（１）学術的「問い」

人類社会統合のしくみとして一般化することになる国家は、どのように成立したのか。それは国家のもとにある現代社会や我々の成り立ちを解明する上で有効な視点であると同時に、人間や社会についての普遍的諸課題を包括している「問い」でもあるため、人文社会科学の諸分野が各々の視座から多様な議論を展開してきた。

（２）国家形成論における西アジアとペルシャ系古代国家の重要性

この「問い」について、考古学での議論は史的唯物論による発展段階史観に根強く規定されてきた。範型をもたらしてきたのが西アジアである。新石器化を起点とする生産技術の進歩により社会文化が累積的に発達して都市が成り、都市の成熟の結果国家が成るという図式による。しかし、こうした従来の図式では説き難い事例として、アケメネス朝ペルシャ（以下、アケメネス朝）をはじめとするペルシャ系古代国家の成立がある。アケメネス朝は紀元前１千年紀半ば、生活様式、言語、信仰の異なる諸集団の包括統治と古代西アジア世界統一を実現した 。人類社会の進化的過程における画期的事象であり、それゆえ世界史上初の帝国、また近現代国家の要件を備えた最初の勢力とも言われる 。重要なのは、それ以前の古代国家とは一線を画す勢力が、これもそれ以前の勢力とは異なり、農耕や都市化の先進地たる文明の「中心」南メソポタミア（現イラク）ではなく文明の「周辺」だった現イラン・イスラム共和国領（以下、イラン）で興り、また、メソポタミア文明を担ったセム語族ではなく、北方由来のインド＝ヨーロッパ語族によって成されたという点である。アケメネス朝の形成は、古代西アジアの統治勢力が以降イランから興るようになる点も含め史上の画期であると同時に、新石器化や都市化を前提としない新たな枠組みでもって検討する必要がある。

（３）ペルシャ系古代国家成立プロセスの説明

「周辺」イランにおける国家形成は「中心」南メソポタミアの影響（軍事侵攻・文化伝播）によるという観念が根強くあり、関連させ得る史上のイベントを画期として考察されてきた 。しかし、同時代史料を遺さなかったペルシャ民族、そして、イランの大部分の地域の動向には不明点が多く残されている。特にイランの北部域については、前２千年紀から物質文化の発達がみられることから着目されてきたが、その背景は説明できていない。また、アケメネス朝が首都をおいたエクバタナを先んじて首都とし、前１千年紀に北部域を統治したとされるメディアは、共通要素の多い先行勢力としてアケメネス朝形成研究の文脈でも注目されてきたが、領域範囲や統合の実態さえ見方は定まっておらず、議論の途上にある。

２．研究の目的

国家形成プロセスの解明と当該現象の人類史上への再定置を目的として、西アジアにおけるアケメネス朝ペルシャを事例とし、実証研究の基盤となる資料ならびにデータの獲得を目指す。本研究では特に、アケメネス朝期ならびにその形成期について、社会の基層を構成する集団の生活様式と資源化戦略、集団化メカニズムに関しての、通時的解明の基礎となるデータの獲得を試みる。具体的には、イラン北西部（カスピ海南西岸域）において明らかにした前８世紀に起こる基層における画期的諸現象（定住的生活様式の導入と資源化域の多様化 、非日用土器の広域での斉一化 、集団秩序を再生産する儀礼様式の刷新）について、現象の総体の解明と、史的評価を目指す。

３．研究の方法

イラン北東部を比較対象とする。当地は生態環境や地政学的位置ならびに文化的背景も、北西部とは異なる。アケメネス朝の痕跡が顕かであることから、北西部での様相を相対化するとともに、アケメネス朝との連関を検討するにも有効である。そこで本計画では、イラン北東部の青銅器時代ならびに鉄器時代について、以下の３つの視点・方法で調査分析を行う。

（１）物質文化編年の設定:

対象地域では通時的分析の基軸となる絶対年代を伴う物質文化編年が不在で、本計画で対象となる青銅器時代後期から鉄器時代にかけて、すなわち北西部の鉄器時代並行期（紀元前 1500 年頃から紀元前４世紀半ば頃）は、土器組成の変遷すら詳らかになっていない。そこで北ホラサーン州において、遺跡踏査により対象時期の土器、層序、放射性炭素年代測定用試料を伴うと推定したモンジョガ・タッペ１遺跡について、測量及びトレンチ調査を行い、出土土器に基づき、対象時期について、絶対年代を伴う土器編年を構築する。現地での調査経験が豊富なイラン人考古学者、ザーボル大学のレザ・ナズリー准教授との共同で実施する。加えて考古学専攻のイラン

人学生が発掘ならびに出土資料の整理作業を補助する。また、整理作業場所、出土資料や機材の保管場所として現地の州立博物館が提供されることになっている。

（２）セトルメント・パターンの推定

広島大学イラン学術調査隊による、1971 年の北東部広域での調査（踏査 82 遺跡、発掘１遺跡)、74 年と 76 年のゴルガーン付近カスピ海南東岸域での網羅的踏査（踏査 224 遺跡、発掘３遺跡）それぞれで得られた土器片 12549 点が分析対象となる。各遺跡のデータおよび考古遺物は大部分が未報告のまま広島大学に所蔵されている。本計画ではこの遺物群を資料化して新規編年に沿って時期比定を行い、また踏査・試掘遺跡を機能で分類した上で採集土器に基づき時期幅を推定する。

（３）土器諸属性の共有状況からみた集団関係の抽出と、集団化メカニズムの推定

固有の価値観や倫理規範の構成員への内在により人のまとまりは再生産され、実体化する 。無文字社会では儀礼が内在化や社会秩序の再生産に寄与するため 、儀礼様式ならびに儀礼用具や消費財、それらの管理体制は、社会構造を評価する視座として有効である 。そこでまず、表採土器中でそうした場面での使用が推測できる土器（非日用土器）を、文化人類学や民族学の知見を援用して、抽出する。そして属性ごとに地域性を明らかにする。特に、上記広域での非日用土器斉一化現象について、指標となる精製土器（オレンジ・ウェア）が北東部でどういった傾向で共有されているのか注視する。

４．研究成果

感染症の影響があり、予定していたイランでの現地調査が予定通りには進捗できなかった。2023 年度になり、対象地域についての青銅器時代の新規データを獲得することができた。Menjaq Tepe 2 遺跡出土土器資料はイラン北東部における青銅器時代初期物質文化の変遷を細分し得る層序データをともなっていると考えられる。当初予定していた時期からは若干遡るものの、共伴する年代測定用試料の測定結果とあわせて、当地における新たな編年指標を提示できる成果であると考える。また、イラン北東部青銅器時代の典型的な土器と、これまでは共伴が認められなかった周辺地域の土器とが共伴する様子を確認することができた。さらなる分析により、当該期の地域間交流の解明や広域編年の構築に貢献し得ると考えられる。動物骨や植物遺存体も併せて出土しており、当時の資源利用の復元にも貢献し得ると考える。

広島大学文学部に所蔵されている研究対象地域由来の考古資料について、整理ならびに基礎データの出版に向けた作業を進めた。なかでも発掘調査が実施された遺跡について、所定の登録作業を完了するはこびとなった。また、発掘調査がなされたものの、その事実自体が未報告であった遺跡について、調査時のデータや記録のアーカイブを整理し、調査区の全貌や層序、検出遺構などを明らかにすることができた。当該遺跡の出土資料の学術的意義は複数の成果でもって既に実証されている。調査時の基本的な情報を加味することで、研究対象地域に関する基礎データとして、出版することが可能になった。

その中で、前８世紀頃にイラン北西部で特徴的なメディア式土器に類似した資料を確認することができた。メディア式土器は近年、イラン北西部以外の地域での出土が指摘されており、広域での分布の可能性が指摘されているが、イラン北東部に関しては未検証だった。当地でもメディア式土器が分布していた可能性を初めて指摘できる成果となり得る。胎土分析にも着手しており、メディア式土器の広域分布のメカニズムを解明するはじめての試みとなる。

さらに、広島大学による遺跡踏査データの精査により、当期の集落が特徴的に、水資源が安定的には確保し難いエリアにも広がっていた可能性を指摘することができた。おそらくは灌漑施設の整備など、大規模な水利施設や土壌改良が求められたと想定できるエリアへの進出がおこっていた。集落数の単なる増加のみならず、資源開発・資源活用の抜本的な変化があったことが考えられる。

地域間の比較研究による人類史における社会進化モデルの再構築に着手した。本研究でテーマとしている古代国家形成は、古典的な社会進化のモデルでは、古代における知識や技術の蓄積の極致、その古代における到達点として長らく位置づけられてきた。同時に、こうした古代国家の位置を含む人類史観について、人文社会科学の様々な分野が払拭の試みを積み重ねてきた。比較研究においては、そうした社会進化モデルの範型となってきた文明の「中心」地域における古代都市ならびに古代国家、そしてそれらの形成プロセスを含む社会進化について、議論を整理した上で問題化を試みた。本研究の対象地域も含む西アジアについて、南アジアや東アジアなどとの比較に加え、地域内でも地政学的な地域分類を行うことにより、従来は範型外として「周辺」あるいは「亜周辺」と位置付けられてきた地域における発展経路や都市国家の在り方こそ、一般化の対象として有効である展望を得た。その上で、本研究で対象とする古代ペルシャの国家形成の重要性を再確認した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 野島 永・有松 唯・宇野 真太朗・小出来 恒平・竹田 千紘・森木 琉・RAC Carmen	４．巻 12
２．論文標題 東広島市長者スクモ塚第１号古墳発掘調査報告（第５次調査）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科考古学研究室紀要	６．最初と最後の頁 43-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/52259	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 有松唯	４．巻 35
２．論文標題 社会の進化論の射程	５．発行年 2021年
３．雑誌名 季刊考古学別冊	６．最初と最後の頁 19‐34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 有松唯
２．発表標題 終焉の彩文 ‐タッペ・アンジラーブを事例とした土器製作技術衰退プロセスの復元‐
３．学会等名 日本に西アジア考古学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 有松唯
２．発表標題 北東ペルシャにおける後期青銅器時代からメディア期にかけての集落動態
３．学会等名 日本オリエント学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yui Arimatsu
２．発表標題 Final Process of Painted Pottery Tradition: Review of Bronze Age Cultural Transition at TappehAnjirab, Gorgan Plain
３．学会等名 Online International Conference for the Iranian Archaeological Webinar
４．発表年 2022年

１．発表者名 有松唯
２．発表標題 社会の進化論の射程‐オリエント文明における「中心」の都市と「周辺」の国家‐
３．学会等名 シンポジウム「社会進化の比較考古学」
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関